

# チャールズ・ウィリアムズの文学世界

## ——『万霊節の前夜』をめぐって——

竹 野 一 雄

### 序

本稿の目的はチャールズ・ウィリアムズ (Charles Williams 1886-1945) の『万霊節の前夜』 (*All Hallows' Eve*, 1945) に焦点を絞ってウィリアムズの構築した文学世界の特徴を考察しようとするものである。考察の対照となる本作品はウィリアムズの著した七つの小説の最後の作品であり、第六作の『地獄への降下』と並び小説家としてのウィリアムズの練達ぶりが窺える傑作である。元来、ウィリアムズは詩を最高の形式と考えており、数冊の詩集や詩劇を著しているだけでなく、彼の墓碑銘には<詩人>と刻まれてもいるので、我々は先ず詩人としてのウィリアムズの研究に取り組むべきであると言えるかもしれない。だが、ウィリアムズを中心主題——超自然は全く自然であり、自然もまた超自然である<sup>1)</sup>——を理解するのに最適であるのは、T. S. エリオットも言っているように『天上の戦い』から『万霊節の前夜』にいたる一連の小説である。ウィリアムズ文学の特徴を見極めるために彼の詩よりも小説の研究を先行させることが有効な所以である。

ウィリアムズの生きた時代は、英国における政治的、哲学的、宗教的動乱

---

恵泉女学園大学 人文学部紀要 第10号 pp. 43~pp. 66, 1998

「チャールズ・ウィリアムズの文学世界」

——『万霊節の前夜』をめぐって——

竹 野 一 雄

の時代であった。動乱の時代に呼応するかのように、極端な主義主張や生き方に徹する文学者たちも立ち現れた。たとえば、H. G. ウェルズは無神論的進化論の代弁者として健筆を振るい、D. H. ロレンスは性の哲学を説き、ジェイムズ・ジョイスはカトリシズムと決別して離郷し、スティーヴン・スペンダーやオーデンは左翼思想を擁護し、これに対し、ウィンダム・ルイスは左翼の文学的・政治的傾向に反対する人々の見解を支持した。英国全体が政治的、哲学的、宗教的に揺れ動き、大部分の人々は右往左往せざるを得ない時代状況の直中にあったが、ウィリアムズは泰然自若としてオックスフォード大学出版局員としての日常の激務をこなし、社会人対象の夜間講座で講義を行い、限られた時間の中で、詩、劇、小説、文学批評、神学、伝記など多方面の分野で次々と読みごたえのある著作を紡ぎ出していったのである。彼の小説には、公爵、牧師、不可知論者、政治家、労働運動の指導者、外務省の役人、心霊主義者、詩人、学者、科学者など様々な人物たちが偏向なく描かれており、ウィリアムズが特定の階層に同調し特定の主義主張に固執している証拠は彼の作品を読むかぎり見当たらない。その意味で、彼はバランスを欠いた時代に翻弄されることなく精神のバランスを保持し得た希有な作家の一人であったと先ず言ってもさしつかえないのではあるまいか。

ウィリアムズの文学的遺産は多方面に及んでいるが、その価値は依然として正当に評価されていないように思われる。その理由は、ウィリアムズの活躍していた当時も彼の死後も変わっていないように思われる。彼の友人の一人であったT. S. エリオットは、1946年12月16日付の『ザ・リスナー』紙上において、ウィリアムズの文学が未だ十分に評価されない理由<sup>2)</sup>を二つ挙げている。エリオットは、ウィリアムズの作品のどれもが文学技法として完璧であるとは言えないことを第一に指摘し、第二の理由として、彼が注意を惹こうとしているリアリティを認識する能力が我々の生きている今日の世界において麻痺し殆ど退化していることを挙げている。この二つの理由は現在もウィリアムズ評価の要であろう。エリオットが指摘した第一の理由はウィリアムズの試みた文学形式のことであるに違いない。ウィリアムズ文学には小説のみならず他の文学形式においても特異性が見られる。それはすでに指摘した

ウィリアムズの主題と密接な関係がある。ウィリアムズの方法は、伝統的な文学形式の法則に慣れ親しんでいる読者にとって、いわば領域侵犯行為とも映るものである。というのも、『万霊節の前夜』においても明白であるが、彼は、夢のヴィジョンであるとか、架空の物語であるとか少しも匂わせずに、自然世界と超自然世界を一つの領域と見なして作品世界を構築しているからである。「チャールズ・ウィリアムズほどに近代文学のリアリズムを疑ってかかった作家はいないと思われる」<sup>3)</sup>と山形和美氏は正鵠を射る指摘をしているが、ウィリアムズが近代文学のリアリズムを疑って彼独自の形式を創案してみせたことに彼の作品評価をめぐっての戸惑いもあるわけで、彼の方法を受容できる読者もいるが、それをにべも無く拒絶する読者も少なからずいるのである。ウィリアムズが現実世界を離れることなしにファンタジーやオカルトの要素を取り込む文学を産みだしたこと、彼の小説もまた近代文学のリアリズムと異なるということ、その意味で、小説家としてのウィリアムズは20世紀の英国小説史上において特異な位置を占めているということを彼に関する第二の事として指摘しておかなければならないであろう。

次に、エリオットの指摘した第二の理由はウィリアムズ文学の特質をも告げていることに言及したい。ウィリアムズが我々に伝えようとしたリアリティを認識する我々の能力の麻痺や退化を指摘した直後に、エリオットは次のように主張している。

……もしもこの能力がわれわれの中に潜んでいるのであれば、ウィリアムズはそれを喚起する作家である。私は、ウィリアムズがキリスト教徒作家であるとか、現代世界がキリスト教的でなくなったと言っているのではない。事はそれほど単純なことではない。霊的実在を信じておりながらその経験を全く持たない実に多くのキリスト教徒が今日存在している。彼らのキリスト教は意識であるよりも願望である。ウィリアムズが実際に経験したことに直面させられることは、他の人々にとってと同様に、キリスト教徒とみずからを呼ぶ人々にとって、われわれの時代において大いに必要なことである。<sup>4)</sup>

要するに、ウィリアムズは深いキリスト教的靈性を有しているが、或る特定の宗派の教義を喧伝する護教作家なのではなく、真理の真摯な探究者であり続けた作家であり、彼自身が持った類の経験に読者をあずからせることが彼の目的であったということであろう。ウィリアムズについて指摘しておくべき第三の事は、彼の文学が我々の中に潜在的にある能力、すなわち究極的実在を認識する能力を甦らせ、それによって我々に新たな眼で事物を見る力を与える契機になり得るのではあるまいかということである。

### ウィリアムズの小説の全般的特徴

『万霊節の前夜』の考察に先立って、ウィリアムズの七つの小説に共通する全般的特徴を挙げてみる。これによって彼の小説の特質が或る程度は明らかにされるであろう。

七つの小説に共通する特徴は四項目<sup>5)</sup>になる。第一の特徴は、言うまでもなく超自然的力の導入であり、自然乃至物質界と超自然乃至靈界との境界線の不在である。超自然的力を秘めた事物や人や空間のいずれかが物質界と靈界を結ぶ扉の役割を果たし、自然と超自然が一体である世界が提示される。それが生者の世界と死者の世界の交流という形で提示される場合には、ウィリアムズのカイロスの時間意識が濃厚に現出される。ウィリアムズの全小説に超自然的力の働きが盛り込まれているが、彼の提示しようとする超自然は、グリム童話やお伽話に見られる得たいの知れない不可思議な力ではなく、自然界の創造者、真善美の源、そして愛と道德知性に満ち溢れた聖なる力である。その想像を絶する力が突如として顕現し、時に暴力的に物質世界に侵入するのである。第二の特徴は、小説の中に見られるオカルト的要素である。オカルティストの魔術、夢魔、分身、降霊術、テレパシーなどはたんに物語を面白くするために導入されているのではなく、超自然のリアリティの諸相の一面を強調するためであるように思われる。第三の特徴として、一貫した中心テーマは善悪の闘争であると言えるであろう。悪の陣営に属している人々は、自我意識に凝り固まって、他者との関わりを愛をもって受容できないために、自我執着に呪縛された彼らの生き方の総計が永遠の滅びへとみずからを追い

やるのである。これに対して、善の陣営に属している人々は、愛に基づく相互依存関係を所与のものとして受容し、互いに他者の重荷を担い合う関係を生きることによって永遠の祝福への道を選び取るのである。第四の特徴は人物描写に見られる。主要人物たち数名を克明に細部を描き他の人物たちを背景として軽く処理すること、登場人物たちの語る言葉によって性格描写を行うこと、悪人のみならず善人が実在感ある人物として描かれていること、物語の最初から読者が善人や悪人と直観的に分かる人物たちの善や悪が物語の進行に伴い激化する過程が描かれていることなどである。

以上がウィリアムズの小説の全般的特徴であるが、さらに具体的に見ていくことで彼の小説世界の特質を理解することが容易になるであろう。『天上の戦い』(War in Heaven, 1930)、『多次元』(Many Dimensions, 1931)、『強力な切り札』(The Greater Trumps, 1932)においては、或る事物が霊的な力を秘めたものであると同時に超自然的力のシンボルとして用いられている。これらの小説の筋はいずれも、自然と超自然を結ぶ事物の支配獲得をめぐるくりひろげられる善人と悪人との闘争が中心となる。ウィリアムズの小説家としての才能が発揮されるのは自然と超自然を結ぶ事物がその力を顕現する描写の冴えにおいてである。『天上の戦い』において自然と超自然を結ぶ役割を果たすのは聖杯であり、聖杯をめぐる、教会教区副監督とモーニントンと公爵がアーサー王の円卓の騎士さながらにグレゴリーやオカルティストのドミトリーやマナセと闘う。また、『多次元』では、スレイマン王の王冠に由来する宝石が自然と超自然とを結ぶ事物である。この宝石は聖杯と同様に超自然的力を秘めており、物語全体はその争奪をめぐる展開する。登場人物たちは宝石に対して中立的な態度を保持できず、それを擁護する陣営かその力を誤用する陣営かのいずれかを選択しなければならないように駆り立てられる。クロエやオーグレイは宝石を擁護しジャイルズやデイマリスはその悪用を企むのである。『強力な切り札』において自然と超自然を結びつけるものはタロット・カードである。主要人物たちの行動とタロット・カードの象徴とを関連づけさせる仕方で物語が進行し、78枚のカードうち強力な切り札として知られる22枚のカードは霊的な力のイメージであり、それらはカードを所有する

人々によって正しくも悪く用いられるのである。邪悪なヘンリィやアロンがカードを盗み出し恐ろしい嵐を呼び起こすが、その嵐を制御できるのは愛の実践者であるシビルである。この小説は愛を求めてそれを見出すシビルやロザイアーとファウスト的知識を求める邪悪なアロンやヘンリィとの闘争が主筋を形づくっている。『ライオンの場』(*The Place of the Lion*, 1931)においては、聖杯、宝石、タロット・カードに代わって心霊術者ベリンジャーと彼の家が自然と超自然の扉の役割を果たしている。プラトンのようなアイデアの世界が現実世界に暴力的に侵入し、物質世界を脅かす。その力は利己的追求に終始するフォースターやドーラには破壊的な力として働き、愛に基づく関係に生きるアントニーには創造的な力として働く有り様が見事に描写される。『恍惚の影』(*Shadow of Ecstasy*, 1933)はアフリカ全土にわたる宗教的・政治的暴動を主筋とする物語である。その暴動の背後にいる指導者コンスティダインは、心理的エネルギーの深遠を理解し、それを制御する方法を会得して永続的な生命へと転化することに成功した人物で、200歳になるにも関わらず年老いた様子は全く見られない。彼はヨーロッパの合理主義を否定し、アフリカの直観とエクスタシーに基づく新しい人間の王国を築こうとする。物語は、彼を取り巻く人物たちの反応の種々層と、彼のめざす運動が実は特殊な新植民地主義であることが露になる過程を描く。『地獄への降下』はバトル・ヒルという場所を、『万霊節の前夜』はロンドンという都市を、それぞれ自然と超自然がひとつの領域である空間として設定している。バトル・ヒルは過去、現在、未来が同時に存在する永遠の現在であり、生者と死者が出会うことのできる場として設定されている。他方、世俗都市ロンドンは神の都の聖なる力とサタンの邪悪な力の戦場として設定されているのである。『地獄への降下』では、スタンハウプとポーリンがウェントワースと対決し、『万霊節の前夜』では、レスターとリチャードとジョナサンたちが係争的人物ベティをめぐる魔術師サイモンと闘うのである。

以上、ウィリアムズの小説の全般の特徴について簡潔に記したのであるが、これだけをもってしてもウィリアムズの小説世界が日常の次元と超自然の次元の交差乃至混在する内容であり、彼の小説世界がどのような雰囲気を持ち

ることになるかを多少なりとも推察できるのではなかろうか。ウィリアムズの小説が一風変わったものであるとの前提認識を持つことができれば、以下における『万霊節の前夜』の物語内容の詳細な梗概の記述と物語構造の分析の試みに向き合う準備も整えられたことになると思われるのである。

### 『万霊節の前夜』の梗概

レスター・ファーニバルは夕暮れ時に誰の姿も見えないウェストミンスター橋に佇み静まり返ったロンドンの街を眺めている。やがてレスターは、地下鉄駅でイヴリンに会うために出かけた途中で彼女に出くわした矢先に飛行機が二人の頭上に墜落したことを思い出す。レスターとイヴリンは死者の世界に移されたのである。数日後であろうか、レスターは異様な静けさの中で、誰かを見たいというかすかな願望を抱く。そのとき、夫のリチャードの足音が聞こえてくる。レスターには彼の姿が見える。彼が近づいたので、「どこにいたの。なにをしていたの。待っていたのよ」(5)\*とレスターは言うのだが、彼にはなんのことか分からないようだった。やがて彼の姿はレスターの視界から次第に消え去っていく。レスターの心に夫に対する思いが後悔の念と共に募る。レスターは地下鉄駅でイヴリンに会うために出かけたとき、＜死後の生＞の心構えができていなかった。レスターはイヴリンの姿を認め彼女の方に向かって歩いて行く。イヴリンもレスターに近づいてくる。イヴリンはレスターを公園に連れていく。イヴリンは新しい事態を素直に受け入れることができずにすすり泣き、レスター相手に喋り続けて恐怖から逃れようとする。レスターはイヴリンに腕を掴まれ、ぞっとする感触を思い出すのであるが、じっと堪える。彼女はイヴリンの腕をとって公園から出て行く。

レスターが埋葬されてから一ヵ月余りが経過した。リチャードの傷心は未だ癒えない。彼にとってレスターの存在は大きかった。「彼女は、遠くから、だが確かに、自分では知らずに、すべてを支配していた。すべてへの彼女の参入は絶対的であった。そして彼女を失った後、苦痛の参入が」(24)。リチャードは友人の画家ジョナサン・ドレイトンを訪ねる。ジョナサンはベティと婚約したことを彼に告げ、部屋にある二枚の絵を彼に見せて批評を求め

る。一方は爆撃跡も生々しいロンドンの絵で、光がひととき目立つ。リチャードはその絵を吟味しながら「これはまるで現代の創世記、すくなくともロンドンの創世記だ」(28)と激賞する。もう一方の絵は布で覆われている。覆いを取ると、そこにはサイモン牧師と信者たちが描かれている。リチャードにはサイモンの顔の表情が読みとれない。そして彼は、「この男はひどく明確であり、同時に全く不明確——絶対的な達人で、同時にどうしようもない狂信者——であるように見える」(33)と結論づける。

ウォリングフォード夫人とベティがやって来る。夫人は部屋に入るなり、サイモンを描いた絵を見せてほしいとジョナサンに要求する。それを見た彼女はジョナサンに対して憤る。彼女によれば、サイモン牧師と信者たちは甲虫のよう見えると言うのである。彼女はベティとの結婚はなかったことにすると口走り、ジョナサンの部屋から立ち去る。リチャードは再びサイモンの顔を吟味しながら、「その無表情な顔は奇跡など行えない。もし行えるとしても墮落と喪失の奇跡でしかない」(44)と思う。

リチャードはサイモンの住むホルボーンへ向かって歩き出す。レスターが生きていればジョナサンの助けになったであろうと、リチャードが彼女の魅力を思い起こしているさなか、彼は彼女の姿を交差点の向かい側に認めた。レスターはだれかと一緒に歩いているようであった。間もなくリチャードの視界からレスターは消えた。リチャードに都心の混乱した物音が聞こえてきた。

ジョナサンは客人たちが帰ってから1時間経過した頃にベティに連絡してみたが、電話を取り次いでもらえなかった。彼はベティとウォリングフォード夫人にそれぞれ手紙を書いた。ベティには結婚への道筋を示し、夫人にはサイモンを描いた絵の公表を控える旨の譲歩の手紙であった。ジョナサンはベティからの電話に備えて真夜中まで手紙を投函せずにいたが、何の連絡もなかった。彼が手紙を投函しに出かけようとしたそのとき、玄関でベルが鳴り、サイモン牧師が来訪した。サイモン牧師は彼と信者たちを描いた絵について、「これこそ私である。」(56)と言ってジョナサンを安堵させる。サイモンは彼の肖像画に白痴性のなかに潜みそれを否定するものを見て取ったのである。他方、サイモンはロンドンの風景画については光の幻想であると見なし、その



絵を廃棄するように言う。サイモンはジョナサンの家を後にし、ハイゲイトの方へ向かって歩いていくのだが、そのとき「都市は彼の周りに縮んで小さくなるようであった。」(61)

サイモンはジョナサン宅を後にし、ハイゲイトにあるウォリングフォード夫人の家を訪ねる。ベティは身支度をして階下へ降りてくるように命じられる。サイモンはベティに催眠術をかける。催眠状態のベティは家の外に出て行き、5分後に戻ってくる。サイモンはベティを利用して霊界の情報を得ようとしているのである。戻ってきたベティは疲れ切って倒れる。サイモンとウォリングフォード夫人はベティを寝室に運ぶ。サイモンはベティの口許に耳を近づけベティが小声で喋る言葉を聞き取り、それを常ならぬ声で繰り返し、ウォリングフォード夫人が筆記する。

ベティがハイゲイトの家から出ていった5分間の出来事がベティの意識をとおして語られる。ベティは死者の世界に送り込まれ、至福感を覚えながら都の中心へ向かって歩いていく。彼女は鮮烈な夢をみる。分身に会うためキングズ・クロス駅に来ているのだった。もうひとりのベティはヨーク行きの列車が待っているプラットフォームにいる。ウォリングフォード夫人と一緒に。ベティは分身に声をかけて励ます。3ヶ月前の自分にベティは語りかけているのである。そしていつの間にかベティは今度は3ヶ後の1月の空の下を歩いていた。ベティは都から帰る辛さを覚える。彼女は恋人に向かって「ジョナサン」(85)と叫ぶ。その声は都全体に響きわたり、ベティの歩く同じ空の下を彷徨しているレスターとイヴリンに届く。レスターもリチャードの名前を響かせようとして叫んでみたが、まるで長く使わなかったために錆ついているような鈍い響きがしただけであったので、彼女は慄然とする。「ジョナサン」という叫び声がベティのものであることを知ったイヴリンは声の主の在り処をつきとめてそこに向かって走る。ベティは自分の方に向かって走ってくるイヴリンの姿を認め、都を去りたくないのだが、ベティから逃れるためにハイゲイトの家に疲れ切って戻るのである。ベティにとっては、イヴリンにいつも話相手にさせられて苛められていた記憶が鮮烈であったからである。

リチャードは、ジョナサンの家からの帰宅途中でレスターの幻影を見たために心が乱れ眠れない夜を過ごしている。彼はレスターをどんなに愛しているか知らなかったと思う。翌朝、ジョナサンから電話がありサイモンの来訪のことや絵のことについて聞かされる。ジョナサンは、どうやらサイモンが気に入らない様子で、リチャードにサイモンと直に会って欲しいと要請する。リチャードはサイモンが住む家に出向くことになる。

リチャードはサイモンの館に到着し、ウォリングフォード夫人ともそこで会うことになる。サイモンは〈やすらぎの集い〉に彼を誘う。リチャードがサイモンにレスターのことを話したとき、サイモンは「大抵のことは可能です。もしも私が使いを出せば奥さんは来られるでしょう」(105)と言ったのである。彼は、死んで来られるとはどういうことかと訝りながら、〈やすらぎの集い〉が開かれる場所へ他の者たちと一緒に移動する。皆が席に座り、サイモンは催眠術的呪文を唱え始める。サイモンは死者の霊を呼び戻しにかかっている。リチャードはサイモンの声に呪縛されそうになるが、レスターのことを考えていた。彼女の苛立ちの瞬間の彼女のことを。そして彼はウエストミンスター橋で聞いた「どうしてわたしを待たせたのよ」(115)というレスターの声で我に帰る。サイモンの呪文は続いていた。リチャードはレスターの友人イヴリンの顔が室の円窓の向こう側に立ち現れるのを見る。サイモンとイヴリンが互いに微笑み交わしている光景を見る。リチャードは霊的法則の侵犯を見たと確信する。

レスターはベティの後を追ってハイゲイトの家に向かいその中に入った。レスターはベティの部屋に向かう階段の下でその階段を降りて来ようとするサイモンと出くわす。彼女はベティに会いに来たことを告げる。レスターは自分が過去においてベティを拒絶したこと、故意の悪意よりは怠慢と無関心から拒絶したことを思い出し、様々な時の様々なベティの姿が眼のまえに立ち現れる中で、「ベティ！」(123)と必死に叫び、階段を駆け上がり、ベティの部屋に入る。一方、サイモンは自分の問いかけに耐えられなかったのでレスターは消滅したと考えるのであった。

眠りについていたベティが眼を開けてレスターに語りかける。レスターは

自分がベティに対して愛を欠いた振る舞いをしていたことをベディに思い出して欲しいと切望する。ベティはすべてを思い出す。レスターはベティに許しを乞う。レスターはベティが許してくれたことを悟る。ベティは昔のことを話し出す。湖のこと。水の中にいて魚がその背中で彼女を押し上げて水面にでてきたこと。横になっていると太陽が輝いていて陽光の中を漂っていたことなど。大好きな乳母が水中から彼女を引き上げたことなど。そしてベティは眠りに就く。眠ったベティはもはや快活なベティではなく疲労困憊して死んだような状態であった。

他方、イヴリンはハイゲイトの家に入ることを躊躇していた。その中に入る勇気がなかったからである。彼女は遠くから聞こえる御名の響きに捉えられた。その声がする方に向かって走った。それはサイモンによる汚された<テトラグラマトン>であった。イヴリンはホルボーンホルボーンの館の一室でおこなわれている<くやすらぎの集い>の場に引き寄せられたのである。サイモンとイヴリンとが微笑みかわしている有様をリチャードは一瞬垣間見るのであった。

リチャードはジョナサンのところへ向かう。サイモンの館で今し方目撃したことを伝えるために。リチャードはサイモンがイヴリンの霊を地上に呼び戻したとすればレスターをも制御しようとするかもしれないと不安になる。

リチャードとジョナサンはサイモン牧師と信者たちの絵をみやりながら、レスターやベティはサイモンに屈することはあるまいと思う。二人はロンドンの風景を描いた別の絵を眺める。光が画面から彼の方へ押し流すように溢れ、リチャードは心新たにされる。絵を見ているとき、沈黙のなかに微かな音が聞こえる。その音は部屋のあちこちにこだまとなって返った。それは一瞬のことであったが、リチャードはレスターは大丈夫であると突然信じたのである。彼女は神の御慈悲により生きていると。二人はウォリングフォード夫人の家へと足早に向かう。

ウォリングフォード夫人の家の一室では魔術的生け贄をささげる儀式が始まろうとしていた。霊界から呼び出したイヴリンと引き換えにベティを霊界に送り込もうとしているのであった。サイモンは、ベティの霊を肉体から分離し、残された肉体をウォリングフォード夫人に持たせてヨークシアの家

帰らせようと企む。必要な時にいつでもベティの肉体を利用できるようにするために暫しはそこに隠しておくためである。

サイモンがベティの傍らにいる。レスターもベティの寝台の傍らにいるのである。サイモンはベティに呪術をかけ始める。レスターはベティに呼びかける。ベティもそれに応える。サイモンの逆さくテトラグラマトン>は続いている。レスターはサイモンの呪文が自分にたいして向けられているのに気づく。レスターはベティに代わってサイモンの呪文を引き受ける。ベティは静かな眠りに就く。レスターはサイモンの詠唱に烈しく痛めつけられる。失神寸前となりレスターが虚無のなかに吸収されそうになったとき、ベティが突然寝返りを打って寝言を言う。その瞬間サイモンの詠唱にたじろぎがあった。サイモンはベティが言ったことを聞き逃したのである。ベティは「レスター！」(162)と言ったのである。その声の振動はあらゆる方向へ伝わった。その振動によってジョナサン家でリチャードは微かな音を聞いたのである。レスターはベティに代わってサイモンの呪文を身に受け、サイモンの呪縛からベティを解き放ったのである。リチャードはジョナサンとともにベティの部屋に闖入する。リチャードはレスターに向かって「ずいぶん待たせたね。ごめんよ」(169)と言ったが、他の者には誰にもものを言っているのか分からなかった。

サイモンの魔術的生け贄の儀式が執行されている間、イヴリンは戸口の石段に座っていた。ベティの部屋からサイモンが出てくる。彼は魔術に邪魔が入った理由をイヴリンから聞き出そうとする。彼はホルボーン裏の館に戻る。イヴリンは彼の後を追う。サイモンは密会の広間に入り椅子に座る。イヴリンは彼の傍まで行かずに扉の内側で彼が話しかけてくれるのを待っている。暗い広間には魚の匂いが充満している。イヴリンは水底にいて水圧のために肺が圧迫されているような感触を覚える。

サイモンの問いかけがあり、イヴリンは堰を切ったように喋り始める。だが、彼が知りたがっていることしか言えない。サイモンは彼女に問う、「お前は今一番なにを望むのか。」イヴリンは答える、「帰ること、でなければ誰か話し相手を……」(177)と。サイモンはイヴリンの霊を支配下に置いている。

彼はレスターを連れてくれば話し相手としてベティをいつまでもイヴリンに与えようと言う。イヴリンはサイモンの申し出に抗することはできない。サイモンは死んだばかりの霊が肉体という宿への烈しい渴望を抱くのを知っているのであった。

ウォリングフォード夫人の家の一室でレスターがベティと語り合っている折り、レスターはサイモンの館の秘密の部屋で苦渋に満ちたイヴリンの顔を見る。レスターはイヴリンに乞われてサイモンの館に向う。サイモンは魔術を駆使して背の低い醜悪な形の生き物を造り上げる。霊であるイヴリンはその肉体の中にひとりで入りたいのだが、レスターも一緒になければ入れないとサイモンに言われ、レスターに要請する。レスターは入りたくもないが、イヴリンに対する愛の義務から同意する。サイモンは魔術的生け贄の邪魔者を醜悪な肉体のなかに狙いどおり閉じ込めることに成功する。その女はサイモンの館の玄関からロンドンの街中へ出ていく。

ウォリングフォード夫人、リチャード、ジョナサンが夫人の応接間に座っている。ベティが元気な様子で階段を降りてくる。ベティは女中のニーナの祖母が乳母であることを知らされる。ジョナサンはベティと一緒に彼女の乳母プラムストラット夫人のところへ出かけていく。乳母は、ウォリングフォード夫人とは折り合いが悪く解雇されることとなったが、密かに自分でベティに洗礼をさずけたことを打ち明ける。リチャードはアパートへ戻る。暫し眠り目覚めると、爽やかで活力が漲るのを感じる。起き上がってレスターのことを思い起こしていると外務省の同僚から電話がかかってくる。サイモンと彼の分身であるところの他の民族指導者を通して、連合国の議論が浸透するようにするために、サイモンに打診して欲しい旨の電話であった。

背の低い女姿のレスターとイヴリンの霊はロンドン市内をあてどもなく彷徨する。やがてレスターは、イヴリンの目的地のない道行を制御し、リチャードに会いに行くことを決意する。醜い姿の女は往来で道行く人に2ペンスを恵んでもらい、レスターは電話でリチャードと話をする。レスターとイヴリンの霊を入れた肉体がジョナサンの家を訪れ、ベティ、ジョナサン、リチャードと会見する。醜悪な肉体のなかにあるレスターのことが辛うじて見

えるのはベティだけであった。ベティの機転でリチャードとジョナサンは背の低い女に背を向けて窓際に立つ。リチャードはレスターの声に応答し、暫くして振り向く。レスターはリチャードに会うことが出来た。彼女は彼に会えたので、彼女の霊が入り込んでいる肉体をサイモンに返すべきであることを悟る。一同はタクシーに乗りこみサイモンの館に向かう。

サイモンはハイゲイトの邸宅で一人夕食の席に就いているウォリングフォード夫人にテレパシーで命令する。夫人はベティの部屋に入りヘア・ブラシからベティの金髪を二、三本とってサイモンの館に向かう。サイモンはベティの金髪を予め用意していた練り粉と混ぜ、さらになにかを加えて女の姿をした人形を造る。サイモンは夫人に人形を持たせ、彼に向かってそれを捧げるような恰好をさせ、ベティの名を繰り返して呼ぶように命じる。彼女がベティの名を連呼しているさなか、サイモンは左手に持った針で人形を突き刺しにかかると。その針は夫人の中指の先に刺さり血が滲み出る。血が流れ出て、夫人の右手と人形は離れなくなる。さらにもう一度サイモンが針で刺すと再び針は夫人の人指し指に刺さり、夫人は悲鳴をあげるが、その悲鳴はもはや夫人からではなく人形から出ているようであった。ウォリングフォード夫人はベティの身代わりをさせられているのである。

怪しげな魔術が執行されているところに、リチャード、ジョナサン、ベティらと背の低い醜悪な女の姿をしたレスターとイヴリンが闖入する。館の住人たちはいまや痛みを覚えてサイモンに癒しを求め彼のいるところへと列をなして進んで行くところであった。イヴリンが先頭に立つ。サイモンのいるところへと急ぐ。サイモンが居る円の中に入れば安全であると思って。レスターはサイモンの秘密の広間に入るやいなやサイモンの造った女の肉体からは自由にされていた。都の御業によって。

ベティはイヴリンを掴み、ジョナサンはベティを掴む。ベティはジョナサンに手を振り切るように言う。彼女は、最後にジョナサンの手を振り切り、振りたたき、イヴリンとともに円の中に入る。すると雨がその中に降り注ぎ、イヴリンの肉体は溶け土くれと化す。サイモンはベティを殺そうとするが、雨で視界がままならなくなったウォリングフォード夫人がサイモンの手に握ら

れた針を振り落とす動作をする羽目になった。夫人はその場に倒れる。一方、サイモンは彼の分身が空中を歩いて近づいてくるのを見たとき首尾よく一体化をはかることができずに死を迎えることとなる。

その後、ベティはイヴリンとレスターに会いまみえ、レスターとイヴリンはそれぞれ別の方向に進んでゆくことになる。レスターはリチャードと別れを告げる。ベティはサイモンの館で痛みを覚えている人々に手を置いて癒しの業にとりかかる。

### 『万霊節の前夜』の物語構造ならびに主題と意味

まず、本作品の題名と物語の時間との関係について考えてみたい。言うまでもなく<万霊節>乃至<万聖節>は西方教会の諸聖人の祝日(11月1日)である。その前夜の10月31日のハロウィーンには、煉獄にある霊が一時的に解放され地上に帰還すると考えられていた。従って、<万霊節の前夜>は物語の時間的枠組みを示すものであると同時に、飛行機事故で死者となったレスターとイヴリンの霊が一時的に生者の世界を訪れるという物語内容を端的に示す題名であるということになるであろう。実際のところ、物語の時間は第1章(9月末日頃)、第2章(10月30日)、第10章後半部分(11月1日)を除けば10月31日に限定されている。物語時間をこのように確定し得る根拠は、2章冒頭の「レスターが埋葬されてから1カ月余りが経過した」(23)という一文、第3章でサイモン牧師がジョナサン宅を訪れた後「鐘が午前12時15分の時を告げた」(55)という時刻の提示部分、そして第5章の「朝方、彼は急いで出かけようとしていた。実際、今にもそうしようとしていた時、ジョナサンが電話してきた。ジョナサンは牧師の訪問と、例の絵を牧師が受け入れたことについて彼に告げなかったのだ」(96)という叙述、そして5章以降の様々な出来事の時間を明示する第10章冒頭の「万霊節の前夜は雨が陰鬱にひっきりなしに降っていた」(240)という一文、そして10章後半の「彼女は広間の外にロンドンの早朝の騒音を聞いた」(267)という時間の提示箇所によるものである。従って、物語時間の主要部分は10月31日の午前12時頃から11月1日の朝までに限定されていることになるわけである。だが、物語全体の時間に注目すれば、

『万霊節の前夜』は第1章の夕暮れ時の薄明の世界で始まり第10章の朝の光の世界で終焉することになるのであり、その意味で、物語の結末はレスターが永遠の都へ上昇することを暗示していると言えるのではあるまいか。

次に、本作品における登場人物の描写の特徴とその意義について簡潔に述べてみたい。『万霊節の前夜』における人物描写の特徴は『天上の戦い』以来の一連の小説におけるそれと同様である。第一に、主要人物であるレスターやイヴリンについては特に、またサイモンについてはやや詳しく性格描写が行なわれているが、その他の人物については克明な描写が見られないことである。レスターの夫リチャードであれ、彼の友人ジョナサンであれ、またジョナサンの婚約者ベティや彼女の母であるウォリングフォード夫人であれ、あるいはベティの乳母ミセス・プラムステッドであれ、すべては物語の進行に必要な人物の相互関係を確立するために必要な最小限の描写に抑えられている。第二は、主要人物の語る言葉による性格描写である。たとえば、レスターやリチャード、ジョナサンやベティの発する言葉と彼らの行動に矛盾はなく、言葉それ自体は目的であり、彼らの心の真実を表している。ベティの発する「ジョナサン!」、ベティの「レスター!」という寝言、リチャードのレスターに対する「ずいぶん待たせたね。ごめんよ」という語りかけにも、それぞれの言葉に万感の思いが込められているものとして読者は受け取ることができるのである。これに対して、サイモンの駆使する呪文やウォリングフォード夫人のベティに対する威嚇的言辭、またイヴリンが喋り続けたいために発する言葉は、それぞれ目的遂行のための単なる道具にすぎないものであり、それぞれは精神の邪悪さ、おぞましき、卑小さを読者に印象づける。第三に、物語の進展とともに、読者が物語の最初から善人あるいは悪人と直観する人物たちの善や悪への指向性が激化する過程が描かれることである。このようにして、ウィリアムズは主要人物の有り様を明確に描き分け、人物自身の駆使する言葉によって善悪への指向性を対照的に提示し、善悪の闘争を前景化しようとして企てている。言うまでもなく、ウィリアムズの作品において、善悪の闘争は人間的な闘争に終始するものではなく、ミカエルとサタンの争った天上の戦いの反映であり、自由意志を有する人間が、究極的な救いか滅びを選



扱する重大な行為なのである。その意味で、ウィリアムズの小説は宗教的意識を帯びており、人間の行為の重要性が提起されていると言えるであろう。そうであれば、何故にグレアム・グリーンがウィリアムズの小説を無視して「ヘンリー・ジェームズの死とともに、英国小説から宗教的意識が失われ、宗教的意識の喪失に伴い、人間の行為の重要性が失われた」<sup>6)</sup>と断言したのかが疑問として残る

さて、すでに記した『万霊節の前夜』の克明な梗概を前提として、本作品の物語構造についてさらに詳しく検討し、作品の主題と意味を明らかにしたいと思う。

第1章はウエストミンスター橋上を舞台とする現実世界の物語の展開であると思わせるが、実は、都市ロンドンの有り様を死者の視点で物語するという奇想天外な状況設定で始まる。レスターの視点によって語られる内容が飛行機事故に見舞われた彼女の死後直後の意識の描写であることに読者が気づくのは本文を数頁読み進めた後である。第1章では死者の世界に在るレスターの視点から生者の世界に在るリチャードの様子が、レスターのリチャードに対する哀惜の念とともに迫真的に描かれ、また、レスターとイヴリンの対照的な存在の有り様が提示される。第2章ではジョナサンの描いた<空襲跡のロンドン>と<サイモン牧師と信者たち>の二枚の絵に対して、ジョナサンの家を訪問したリチャードとウォリングフォード夫人のそれぞれの反応が提示される。後者の絵に対してサイモンの邪悪さを見て取ったリチャードの批評とウォリングフォード夫人の不満は一種のサスペンスの効果を与え、サイモンの登場に先立って、何とも言えない不快かつ不吉な雰囲気サイモンに帯びさせる。他方、リチャードは帰宅途中で死んだレスターの臃な姿を一瞬垣間見るのであるが、彼の意識を通して、この時点での彼のレスターに対する愛情の深まりが提示され、第1章とは逆に生者の視点から死者の世界を見ている描写によって、劇的アイロニーの効果が読者にとっては物語の牽引力となる。

第3章で、サイモンは真夜中にジョナサンの家を訪問するのであるが、彼の邪悪さが暗闇の中で行動する点において象徴的に現れている。サイモンは

自画像を受け入れるのであるが、その判断と前章でのリチャードの判断との落差は新たなサスペンスを喚起する。第3章の後半部分は第4章の伏線的役割を担う。というのも、4章以降で魔術を駆使するサイモンの邪悪な性が読者に印象づけられるからである。3章の後半部分においては、サイモンの内省のかたちで、彼の経歴と性格が叙述される。その叙述をとおして、サイモンがいかなる人物であるのかが読者に明らかになる。彼はパリの巫術の巣窟のひとつで生まれた。彼は貴族の子であり、大革命の時期をくぐり抜けた一家の息子であった。彼の父は貴族であったが、揺盪期の言語学者のひとりであった。だが、彼の言語学は内輪の集団と息子サイモンにとって全く別のものであった。サイモンは「音声と音声の根源を、殆ど音声の始源を——転覆させる震動と築き上げる震動を——知っていた。」(63) 彼は名声と権能を望んだ。彼は巫術の実験に立ち会って、死体が立ち上がって語るのを見た時、己の力を自覚し、世界の支配権を手中にしていることを実感した。彼は霊的即位の時の到来を待っているのである。彼は自分こそ来たるべき者、この世界と霊界の支配者たるべき者であると確信している。このように、サイモン牧師は歴史の終焉に先立って出現する偽キリストを彷彿させる人物であり、『恍惚の影』のナイジェル・コンスティダインのように超人的な長寿の魔術師であることが提示される。サイモンが悪の体現者であることはジョナサンの描いた〈空襲跡のロンドン〉の風景画が支配する強烈な光を嫌悪することで象徴的に示される。

サイモンはウォリングフォード夫人の家でベティを催眠状態に陥らせる。サイモンの魔術により霊界に送り込まれたベティの意識が第4章で克明に描写される。ベティが送り込まれた霊界の様子を鮮明にイメージ化することは困難であるが、ベティの彷徨に付随して叙述される彼女の感覚的な反応の種々相によってウィリアムズは霊界の質を醸しだそうと試みているように思われる。この章では、ジョナサンに対するベティの愛の深さとリチャードに対するレスターの愛の現実の度合いが、それぞれがそれぞれの相手に発する声の響きによって提示されるとともに、イヴリンの卑小な性質もまた反復提示され、死者の世界におけるレスターとイヴリンの対照的な有り様が描かれる。

第5章。リチャードはサイモンの館を訪れ、降霊術の現場に立ち会うこととなる。そのさなかに、全知の語り手をとおして、ウォリングフォード夫人とサイモンとの関係について、特に夫人がサイモンの秘密を知る唯一の人物であり、たとえば、ベティが彼らの間に21年前に生まれた子であること、サイモンが魔術の行使によって三人に分かたれたこと、分身の二人をそれぞれ中国とロシアに送ったこと、そしてサイモンがベティを利用して霊界との交信を確立しようとして企てていること、さらに、サイモンが分身たちと再合体する時が近づいていることなどが叙述される。また、サイモンの館には脳腫瘍、小児麻痺、癌などを癒された者たちが居住しており、サイモンは一方において<アスクレピオス>的存在であるが、他方において霊界の支配権を渴望する悪魔的存在であることがいよいよ明らかになる。サイモンの降霊術によって支配されるのはイヴリンの霊であってレスターの霊ではない。レスターは死の事実を受容することに躊躇いはないが、イヴリンはその事実を拒絶しようとする傾向が見られる。イヴリンがサイモンの呪術に呼応して生者の世界に引き寄せられるのはイヴリンが誤った選択をすることに他ならないのだが、死者の霊魂はみずからに相応しい音を聞き分けて、一方はベティの声に、他方はサイモンの声に呼応するのである。

第6章は、物語の時間に則して言えば、4章の終わりに引き続く部分と第5章の終わりの部分に相当する。ベティの後を追ってハイゲイトの家の中に入ったレスターは眠っているベティに対して自分が彼女に対して愛を欠いた振る舞いをしたことを思い出して欲しいと希求する。ベティはすべてを思い出す。レスターは許しを乞い、許されたことを確信する。ベティはレスターの過去のみならず自分の幼児洗礼のことも思い出す。それは乳母による洗礼であった。この洗礼の事実こそ、ベティがサイモンとウォリングフォード夫人の呪縛に屈することなく善良な魂の持ち主であり続けてきた遠因であると見なしてさしつかえないであろう。レスターはハイゲイトの家に入ったのだが、イヴリンは入るのをためらい、先に見たように、サイモンの呪文に引き寄せられてしまう。この章では、レスターのベティに対する対応とイヴリンのその相違が明確に示される。レスターの悔い改めは彼女の霊魂の新生と

<都>の中心への道行を、他方において、悔い改めることなど思いもよらないイヴリンの振る舞いは彼女の靈魂の墮落と地獄への道行をそれぞれ暗示する。

第7章で、サイモンは<魔術師シモン>に倣って、靈界をも支配する妖術を施行する。サイモンは、ベティの靈を肉体から分離し、靈界から呼び出したイヴリンと引き換えに、その靈を靈界に送り込もうとする。彼がベティに呪術をかけている場にレスターの靈も臨在している。レスターはベティに向けられたサイモンの逆さ<テトラグラマトン>の詠唱を彼女に代わって引き受ける。彼女は激しい苦痛を味わい、虚無の中に吸収されそうになるが、間一髪で解放される。ここには、ウィリアムズの中心的テーマである<交換>の思想が前景に押し出されたかたちで、しかも死者と生者と間に作用するものとして提示されている。第7章の終わりで、リチャードがジョナサンとともに駆けつけ、苦闘し勝利したレスターに向かって「ずいぶん待たせたね。ごめんよ」と言う場面に、読者は、死者の世界で確実に生きているレスターに対するリチャードの深まりゆく愛の表出を見て取ることができるであろう。

第8章では、ウィリアムズ文学に顕著に見られるクロノ斯的時空の解体とカイロスの視座によって再構成されたリアリティが提示される。それはなによりも、レスターの意識をとおして語られる永遠の都にある永遠の今、すなわち過去、現在、未来のロンドンの描写において顕著である。このカイロスの視座の明確な導入により、この章における荒唐無稽と見えるサイモンの魔術的創造の意味合いも判然としてくるように思われる。なぜなら、サイモンはイヴリンが求める肉体を魔術によって創造し、その醜悪な肉体の中にイヴリンをレスターと一緒に閉じ込めるのであるが、彼の魔術的創造が、唾、塵、息を吹き入れることなど、創世記に見られる人間の創造を模したものであるところから、サイモンは神のごとく振る舞う瀆神的な悪魔的人物であることが鮮明になる。サイモンに悪魔の影を見て取るのは、サイモンのイヴリンに対する提案がマタイやルカ福音書に描かれているサタンのイエスに対する誘惑の言葉に近似しているからでもある。畢竟、サイモンとレスターとの戦いは、永遠の今において戦われているサタンとミカエルの闘争の反映に他なら

ないということが否応なく迫ってくるのである。

第9章では、ベティの洗礼の経緯が明らかにされ、その神秘的な力についての言及が見らると同時にベティの健康な様子が語られる。また、リチャードの過去の回想を通して新生の必要性が語られる。醜悪な肉体の中に入ったイヴリンとレスターはあてどなくロンドン市内を彷徨うが、やがてレスターが主導権を握り、愛するリチャードに会いに行くことになる。レスターは醜悪な肉体のままでジョナサンの家でリチャードに対面する。リチャードは醜悪な背の低い女の肉体に惑わされずにレスターそのものに出会うのである。その出会いの喜びは、レスターとリチャードにとって地上での6ヵ月の結婚生活の中で経験していたあらゆる喜びにまさるものであった。

第10章では、梗概において記したように、サイモンのウォリングフォード夫人に対するテレパシー交信、人形の創造と魔術の施行、サイモンが彼の分身と合体する過程の失敗の経緯が迫真的に描かれる。ウィリアムズの他の小説に見られるように、物語の最後では邪悪な魔術が破れ去り聖なる力の働きが顕現する。天から降り注ぐ雨は<都>の御業の目に見える徴である。レスターにおいて示された愛の交換の実践はベティの癒しの業に引き継がれ、死者の世界にいるレスターで始まった物語は生者の世界に侵入したレスターが死者の世界へ、すなわち浄化の領域である煉獄へ、そしてその後、永遠の都への上昇の暗示で終わるのである。

本作品には全体として顕著な特徴があること否応なく気づかされであろう。それは物質界と霊界の境界線の不在、オカルト的事象の混在、超自然の聖なる力の侵入などである。これらは、生者の世界と死者の世界が一体である領域の提示として、降霊術、魔術的生贄や創造、分身、テレパシーとして、あるいは洗礼の効験や<都>の業の働きとして本作品に盛り込まれている。これらすべてが、レスターやサイモンなどの登場人物とともに、ウィリアムズ独特の文学世界を構築する重要な構成要素であることは、これまで見てきたところから、ある程度は了解されたのではないかと思う。ここで、本作品の主題と意味について、簡潔に要約してみることにしたい。

本作品は、〈万霊節の前夜〉にレスターとイヴリンの霊が生者の世界を一時的に訪れるという点に焦点を合わせて見るならば、ロンドンを舞台に展開される死者と生者の交流の物語と言えるであろう。また、催眠状態のベティの意識の記述、サイモンの分身術や彼の魔術的生贄や創造、或いは死者レスターの意識の克明な描写に焦点を当てれば、本作品は境界線の彼方のリアリティの探究乃至提示の物語と見なしてよいのではあるまいか。さらに、レスターとイヴリン、或いはレスターとサイモンとの対照的な存在の有り様——レスターは事実を受容し愛に基づく交換を実践するが、サイモンやイヴリンは事実を拒否し自我の殻に閉じこもり他者とのあらゆる交換を拒絶するということ——に焦点を当てれば、本作品の主題は、選択としての救いと墮地獄であると同時に善悪の果てしなき闘争であろう。そして、最後にレスターとリチャード、ジョナサンとベティの愛の関係の深化に注目すれば、カバリエロの指摘<sup>7)</sup>に見られるように、本作品は、愛に対する総括的な畏敬の念についてのウィリアムズの意識の最高の表現であると言えるであろう。すなわち生きることの目的は愛することであり、真実に愛することは生のあらゆる諸相と和解することである。この意識はレスターの視点で描写されるテムズ河の眺めに端的に現れている。

テムズ河は汚く乱雑であった。小枝、紙切れ、木片、紐、古い箱が川面に漂っていた。だが、新しい眼を持ったレスターにとって、それは意気消沈させる光景ではなかった。水の汚さは、その特定の時に当然そうあるべきで、それ故に全く快かった。都市の排泄物は都市の中にその場所を占めていた。そのほかにどのようにして都市は都市であり得るのだろうか。腐敗（そう呼ぶことにするが）は許容できるのであり、適切かつ妥当でさえあり、栄光でさえある。これらの事物もまた事実であった。それらは幻想の内に忘れ去られることも失われることもあり得なかった。その時以前にあったすべては存在し、その時にあったすべては存在しているのであった。ふやけたボール紙と紙の団塊が川面を漂い過ぎていったが、ふやけたことそれ自体はひとつの喜びであった。なぜなら、これ

は起こった事であり、起こった事はすべて、この偉大な物質世界においては、善であったからである。<sup>8)</sup>

ここで注意しておかなければならないことは、この引用が作品の文脈を無視して解釈されるべきではないということである。というのも、「……起こった事はすべて、この偉大な物質世界においては、善であったからである」という言葉は、ともすればアウシュヴィッツ以後の時代において、極めて不適切な内容であり、ウィリアムズの歴史的想像力の欠陥を示すものであると指摘されかねないからである。言うまでもなく、この言葉は、ナチズムの容認とは全く関係がないのだが、かりにナチズムを意識しているとしても、その被害者の立場にある英国人として、和解を志向する剛毅からの発想であると考えべきであろう。

## 結 語

ウィリアムズの文学は自然と超自然が一体である領域を前提として構築された想像的な世界である。だが、彼にはロマンスやファンタジーを書いている意識はなかったように思われる。死者の視点であれ、死者と生者の交換であれ、神の力の働きであれ、それらはすべてウィリアムズにとって単なる物語上の思いつきでもなければ非実在でもなかった。彼の文学が正当な評価を受けていない理由についてはエリオットの指摘に見られるとおりであるが、筆者の見るところでは、ウィリアムズの文学には難解さを免れない理由が一つあるように思われるのである。それはウィリアムズの想像力の質である。トールキンを読む場合に必要なのは我々の想像力だけでよい。C. S. ルイスの想像的作品を読む場合にもそれは当てはまる。ただし、彼の場合にはキリスト教の知識があれば作品の味読も理解も深まるに違いない。だが、ウィリアムズの場合には、一見するとキリスト教的な発想と見えないような思想や道具立てであっても、その根幹にはまぎれもなくキリスト教が彼独自の解釈とともに根づいており、その独特なキリスト教理解が彼の想像力と不可分に融合していて、彼の想像力それ自体が彼独特のキリスト教的想像力を形成してい

るのである。それゆえに、我々の想像力がウィリアムズと同じレベルにおいて必ずしも飛翔できるとは限らない事態が生じ得るわけである。無論、彼はキリスト教世界の内側にだけ向かって書いていたのではなく、外側の世界をも常に視野において書いていた作家であった。彼はチェスタトンの物語やC. S. ルイスの神学的風刺文学のように教えようと意図してはいなかったのである。その意味で、彼の文学は難解であるにもかかわらず、境界線の存在を多少なりとも意識する人々にとって、また、境界線の彼方にあるリアリティに関心を抱く人々にとっては殊更に、その究極的実在を意識するみずからの能力を豊かに甦らせ、想像力によってしか捉えることのできない真理を理解し、自己と世界についての思索を深化させる有益な契機となり続けるのであろうと筆者には思われるのである。

\*本文中の引用文の後の（ ）内の数字は*All Hallows' Eve* (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, rpt. 1982) の頁数を示す。

#### 注

- 1) T. S. Eliot, 'Introduction' in *All Hallows' Eve*.
- 2) T. S. Eliot, 'The Significance of Charles Williams', *Listener*, 36 (December 19, 1946), 895.
- 3) 山形和美『岩のつぶやき』, 笠間書院, 1973年, 220頁。
- 4) T. S. Eliot, 'The Significance of Charles Williams', *Listener*, 895.
- 5) 竹野一雄「<聖なるものの実相>——チャールズ・ウィリアムズの小説」, 98-99頁。山形和美編『聖なるものと想像力』下, 彩流社, 1994年所収。
- 6) Graham Greene, *Collected Essays*. London: The Bodley Head, 1969, p.115.
- 7) Glen Cavaliero, *Charles Williams: Poet of Theology*. Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1983. p.95.
- 8) *All Hallows' Eve*, P.222.